

社会美学のコンセプト（２）：エレン・スカ リー『美と正義について』をめぐって

著者	宮原 浩二郎
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	107
ページ	73-86
発行年	2009-03-16
URL	http://hdl.handle.net/10236/2584

社会美学のコンセプト (2)*

— エレン・スカリー『美と正義について』をめぐって —

宮原 浩二郎**

はじめに

「社会を美学する」こと。人と人の交わりからなる社会を、私たち自身の五感を通して探究すること。前稿ではこうした社会美学の特質として次の三点を指摘した。それは、社会のもつ肌ざわり(フィール)を把握すること、身のまわりの小さな社会の探究から始めること、事実の記述や分析にとどまらない価値判断の側面をもつことである(宮原 2008)。本稿では、とくに価値判断の問題を中心として、社会美学の着想と概念形成(コンセプト)をより確かなものにしていくことを試みる。

石川三四郎や A. バリエーションに代表されるように、社会美学は感性的・美的(aesthetic)な意味で「よい」社会を指向する。いいかえれば、私たち一人一人が自分自身の五感を通して「よい」と感じられるような社会を追求する。ここでいう「よい」は「楽しい」「心地よい」「明るい」「あたたかい」「のびのびした」など多様でありうるが、その根底には広い意味での「美」が横たわっている。「美」とは五感を通じて「よい」と判断されるものの総称である。社会美学は自然景観や芸術作品だけでなく、人と人の交わりである社会生活のまっただなかに「美」を見いだす。社会美

学は「社会美」への注目を通じて「美しい社会」を追求する。¹⁾

ところが一般的には、「よい」社会とは道徳的・倫理的な意味で「よい」社会のことを指している。それは「正しい社会」のことである。この「正しい社会」は私たち自身の感覚を通して見たり、聴いたり、触れたりすることはできない。それでも私たちは「自由」、「平等」、「公正」、とりわけ「正義」という抽象概念を拠り所として「正しい社会」について考えている。たんに「よい」社会といえ、この「正しい」社会を思い浮かべるのが一般的である。

そこで、「正しい社会」と「美しい社会」の関係が問題になる。ここに「正義」と「美」の関係をめぐる問題が誘発される。とくに、社会美学は社会認識において「正義」よりも「美」を優先する非倫理的な姿勢として受け取られるおそれがある。もちろん、本当のところ、両者は対立する関係にはない。「正義」は「美」として現われたとき初めて、私たちの感性に直接に訴えかけることができる。「正しい社会」は「美しい社会」となるとき初めて、私たち一人一人の五感を通して見られ、聴かれ、触れられ、味わわれるのである。社会美学は「美」による「正義」の格下げではなく、「美」を通じた「正義」の具現化に着目する。²⁾

*キーワード：社会美、美の分配性、美による脱中心化、正義の可視化、デモクラシー

**関西学院大学社会学部教授

- 1) 「美しい国」は戦前日本の民族主義や国家主義への郷愁を包み込んだ空疎なキャッチフレーズであった。本稿にいう「美しい社会」は個人主義的なりベラル・デモクラシーを基調とし、「人と人の交わり」の質に注目した現実的概念である。
- 2) W. ベンヤミンはナチスの政治運動を「政治の美学化」(aestheticization of politics)として批判した。そこには国家機構をあたかも芸術作品のように造形し、大衆をして崇拜させようとする動きがあった(田野 2008)。本稿にいう「美しい社会」は国家や民族などの集合体ではなく、あくまでも「人と人の交わり」という小さな社会を出発点としている。社会美学は政治を美化するのではなく、社会生活を感性的・美的観点から批判的に探究するのである。

社会認識において「美」の価値を強調すること。これは少なからざる誤解や抵抗に出会う。そこでまずは、「社会を美学する」ことの倫理性について考えていく必要がある。そのとき、アメリカの哲学者エレン・スカリー (Elaine Scarry) の『美と正義について』(On Beauty and Being Just) が豊富なヒントを与えてくれる。スカリーは「美に対する政治的批判」に違和感を表明し、「美」と「正義」の親近性を大胆に主張している。しかも、右派でも保守派でもない、古典的なりべラル・デモクラシーの立場から「美」の擁護を試みている。その上で、ふだんは目に見えない「正義」が「美」として可視化され、体感できない「正義」が「美」として可感化される社会現象に注目している。

スカリーは社会美学 (social aesthetics) に言及していないし、その関心も社会美学の構築にあるわけでもない。それでも、スカリーの仕事は社会美学の展開にとって避けることのできない本質的問題を提示している。以下では、『美と正義について』に寄り添いながら、社会美学の倫理性について検討することにした。

1 「美の脱構築」をめぐる

『美と正義について』は美 (beauty) と出会うことの喜びをあらためて思い起こさせてくれる。美は美術館だけにあるのではない。日常生活のあちこちにある。テーブルに置かれた花瓶、玄関に咲く花、庭に遊ぶ鳥、その鳴き声、ひらけた青空、街を行きかう男女、代表者たちの討論、お祭りのパレード、数学の解法・・・のうちにある。美との出会いは私たちを生き返らせる。「アドレナリンを出させる。鼓動を速める。生をより生き生きとした、活気溢れる、生きるに値するものにする」(Scarry 1999: 24)。

美は目覚めさせ、生き返らせる。生きる喜びを更新する。美は私たちの私生活に無限の恩恵を与えてくれる。だが、それだけではない。スカリーによれば、美は私たちの社会生活にも大きな恩恵をもたらす。なぜなら、美の経験は私たちの

興味関心が私的快樂から公的正義に向かうよう導いてくれるからである。この主張はあまりに能天気 (ナイーブ) なものに思われるかもしれない。だが、以下で検討するように、美の経験が公共生活の正義や公正さの実現に少なからず貢献するという指摘にはそれなりの根拠がある。

『美と正義について』の刊行は1999年である。当初は賛否両論のさまざまな批評に晒されたようだ。「美の復興への情熱的のマニフェスト」「美の威厳を回復しようとする近年のもっとも大胆な企て」「簡潔だが挑戦的」「勇氣ある試み」「非凡な試み」などの肯定的評価がある一方、「ナイーブ」「アマチュア」「エリート主義」「奇妙な本」「20世紀の知的展開を無視している」などの否定的評価も見受けられる。しかし、賛否いずれの立場から「大胆な試み」とみなされた点は一致している。³⁾

まず、美が日常生活のいたるところに溢れているという素朴な確信を、臆面もなく前面に押し出したことがある。まるで古代ギリシャに舞い戻ったかのように、スカリーは美の遍在を強調する。美は「気前よくふだんにあり、ほとんどいつでもほとんど全ての人々に対して存在する。愛し合う人たち (mates)、その子どもたち、彼らの庭を横切る鳥たち、その鳥たちの歌声、美はそこにある」(Scarry 1999: 109)。美を「芸術」という非日常の領域に特化させてきた近代美学と、美のエリート性を自明視する大衆意識からすれば、これは大胆な主張であろう。

次に、美学的カテゴリーとしての「美」を「崇高」(sublime) よりもはるかに高く位置づけていることがある。20世紀以降の現代芸術は美からの離反を強めてきた。「芸術は美しくない」のが現代の常識である。それに対応して、現代美学では崇高が目ざされてきた。優美さや明るさ、均整や調和を思わせる美ではなく、畏怖や異和、メランコリーや暗さを思わせる崇高のほうが現代性に富むとされている。こうした状況に向き合いながら、スカリーは美の復権を主張している。

さらに決定的なのは、リベラル・デモクラシーの立場を堅持しながら、なおかつ、「美の脱構築」

3) いくつかの書評を参考している (Bowman 1999; Dutton 2000; Stone 2000; Altieri 2001; Shepherd 2001; Stackhouse 2002; Kenning 2003; Benson 2008)。

に対して公然と反旗を翻したことである。私たちはここ数十年というもの、美などという幻想を信じないよう促されてきた。あらゆる社会現象と同じく、美もまた政治的・社会的利害によって「構築」されたものであり、その「脱構築」こそが求められている。この立場からすれば、美は特権に奉仕し、社会問題から目をそらし、政治的利害を隠蔽するイデオロギーにはほかならない。美は「ヨーロッパ中心主義的、男根中心主義的、ブルジョア的、家父長制的想像力がもたらす社会的に構築された作り事」であり、「美を愛することは、葉巻や分厚いステーキを愉しんだり、メキシコ人女中を雇うのと同様に、どこか政治的に不格好なもの」とみなされてきた (Kenning 2003: 52; Dutton 2000: 249)。1990年代のアメリカ、「ポリティカル・コレクトネス」の最盛期の大学キャンパスでは、「美」(beauty)という言葉そのものが「政治的に正しくない」とみなされる状況さえ出現した。⁴⁾

「美」と聞くだけで懷疑し、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティ、ポストコロニアリズムなどの「ポリティクス」に還元しようとする。あらゆる「よきもの」の経験を政治・社会的な利害関係やイデオロギーへと「脱構築」しようとする。こうした空気のただなかで、スカリーは政治的保守主義に依拠することなく「美」の潔白を指摘し、さらに進んで、「美」と「正義」の親近性を力強く主張している。この姿勢こそが大胆なのである。⁵⁾

スカリーは言う。「ここ二十年 [1999年時点、筆者]、美に関する言葉 (vocabulary) は人文学の世界から追放され、地下へ追いやられてきた。とはいえ、それらは数学、物理学、宇宙物理学、

化学、生物化学といった「真理」追求の分野では公然と語られている。実験室やセミナー室では毎日のように「ナイス」な問題、「プリティ」な理論、「ビューティフル」な解法、「エレガント」あるいは「シンプル」な方法が議論されている」(Scarry 1999: 52)。自然科学では美が肯定されているのに、人文社会科学でタブー視される。その背景にはすでに述べた「美に対する政治的批判」がある。

美に対する政治的批判・・・の第一は、美が私たちの注目を占領するために誤った社会的取決め (wrong social arrangements) から注意を逸らせてしまう、というものである。美は私たちを不注意にさせ、それゆえ、正しい取決めをもたらそうとする試みに対して無関心にさせる (Scarry 1999: 58)。

美は私たちに惹きつけて私的快楽へと誘惑し、社会的不正から目を逸らさせる。美は社会的不正を「隠蔽」する。スカリーはこうした「美に対する政治的批判」の誤りを指摘する。その根拠として語られているのが、「美の分配性」、「美による脱中心化」、そして「美による正義の可視化」をめぐる議論である。以下、それぞれ検討していこう。

2 美の分配性

スカリーは「美の反対者」に次のように言わせている。

快楽に満ちた知覚 (嘆き鳩がその甘い鳴き声

4) 1990年代のアメリカの大学キャンパスでは、「美的評価の意図をもって女性に目を向ける」ことは「ルッキズム」(lookism)と呼ばれる「思想犯罪、より正確にいえば、眼の犯罪」であった。その背景には「あらゆる快楽を政治的な酸っぱい葡萄に翻訳したがる大学人の衝動」があるとされる (Kenning 2003: 52)。ザディー・スミス的小説『美について』(On Beauty) は2000年代初めの東部エリート大学を舞台に、「美の脱構築」をめぐる知識人たちの生活と葛藤を克明に描き出している (Smith 2005)。この小説にはスカリーの『美と正義について』が大きな影響を与えており、タイトルだけでなく作中にも引用されている。

5) いうまでもないことだが、「美に対する政治的批判」には一定の必然性がある。C. アルティエリによる以下の分析が的確である。「美を道徳的力の担い手とする主張は、二つの社会学的問題に直面する。一方の極では、美の語り beauty-talk が社会的資本を供給してきた歴史があり、そのため、ある芸術作品の主張の特色を明確にすべく努力するよりも、美に対する我々の感受性の特色をめぐって得意になって議論する誘惑に駆られる。他の極には、美をめぐる理論の普遍化的側面が哲学的説明を呼び込む傾向をもち、美学的経験に帰しうる権威が抽象的議論を通して獲得される権威によって取り替えられてしまうことが起きやすい」(Altieri 2001)。

をいくつも積み重ね、遠くの丘で雄鳥が鳴くのを聴く)は道徳的に悪い。嫌やかな知覚(ラジオをつけて、ある一つの意見が故意に抑圧されているのを苦痛とともに聴く)こそ道徳的に良い(Scarry 1999:60-61)。

「美的快樂と道徳性は両立しない。道徳性は辛く苦しい経験の側にある」。これは禁欲主義的な知識人に典型的にみられる傾向である。あらゆる美的快樂のうちにかしらの反道徳性や悪のにおいを嗅ぎつけずにはすまないのである。しかし、スカリーの言う通り、「人間に愛情をもっている人であれば誰でも、不快な知覚だけを許すような苛酷な命令を望んでいるなどと考えることはできない」(Scarry 1999:61)。「快樂に満ちた知覚」から「道徳的に良い」思考や行為への道はけっして狭くはないのである。

スカリーによれば、そもそも道徳性は知覚的な鋭敏さを必要としている。私たちが社会的不正に心を配り、これを正していくためには、何よりもまず不正の存在を身をもって気にかける感受性が必要である。そして私たちはまさに美の経験を通して、自分自身の知覚的な鋭敏さを日々更新していく。

不正に対して高度の敏捷さ(high alertness)を保とうとすれば、まさに美しい光景や音の到来に自分自身を永遠に開いていく、その知覚的鋭敏さがどうしても必要である。ある政治的集まりにおいて一つの経済的見解だけが容認されているとしよう。人はどうやってその不都合に気づき、さらには気づかうようになるのだろうか？それは、この討論そのものが美しさの対象であり、さまざまな議論と反論、機知、気迫、当意即妙、反語、テストとコンテストが展開されている、そうした場に完全な鋭敏さ(full acuity)をもって自ら参加することなしには不可能である。人は鳥や詩人の歌にその身を委ねることなくして、どうやってこの討論のニュアンスを聞きとろうとするのだろうか？(Scarry 1999:60-61)。

ここでスカリーが言及している「討論そのもの

の美しさ」は社会美学への接近を示す重要な指摘であり、本稿の後半でより踏み込んだ考察を行いたい。さしあたり確認したいのは、快樂に満ちた美の経験(「美しい光景や音」「鳥や詩人の歌」)が物事に対する私たちの繊細な感受性(「高度の敏捷さ」「知覚的鋭敏さ」「完全な鋭敏さ」)をもたらし、それが苦痛や嫌気をとまなう社会的不正に対する心配りへとつながっていくという指摘である。いいかえれば、私たちは美と出会うことを通して、結果的に、正義への感受性をも養っているというのである。

スカリーはこのような美の波及効果を「分配への圧力」(pressure toward the distributional)と呼ぶ。たとえば、ここに美しい花瓶がある。私たちはこの花瓶を見るたびに喜び、汚さないように、壊さないようにと大切に扱う。そのとき、私たちは他の平凡な花瓶への注目を減らし、それらを粗末に扱うようになるのだろうか。そんなことはない、とスカリーは言う。

完璧な花瓶や神や詩から要求される気づかいは、私に一定の気づかい(care)の基準もたらず。そして私はその基準を他のより平凡な事物にも拡張し始めるという方がありえそうなことに思える(私はそのとき初めて、この平凡な事物を粗末にしていたことに気づいて心配になる。そして、より丁寧に調べた結果、それが意外に平凡でないことを発見するかもしれない)。非凡な花瓶は平凡な花瓶からその壊れやすさを差し引いたり奪ったりするどころか、「花瓶は壊れやすい」という認識を知らずもこの私のもとにもたらず。そこで私は自発的にこの認識を同じカテゴリーに属する他の対象へと拡張するのである(Scarry 1999:67)。

美しい事物は私たちの注意を惹く。五感と心の働きをより鋭く、よりきめ細やかなものにする。こうして活性化され高められた感覚をもって、私たちは身の回りの事物をあらためて見なおし、聴きなおし、触れなおし、味わいなおす。すると、それまで何とも思わなかった事物がにわかには新鮮に感じられ、そこに繊細な美が発見されることが

ある。また反対に、一般的に美しいものとされてきたがゆえにそう接してきた物事のうちに、巧妙な醜さが発見されることもある。たしかに、美しい事物は私たちの注意を一時的に独占する。が、それでおわるのではないだ。「何かが注目を集める」ことは「他の何かが注目を集めなくなる」ことを意味しない。美の経験は私たちの注意力を高め、「心づかひの厳格な基準」(rigorous standard of care)を新たに甦生させる。この波及効果によって、美の恩恵は身のまわりのさまざまな事物へと分配されていく。

「心づかひの厳格な基準」が身のまわりの共同生活に向けられるとき、私たちは人と人の交わりにおける美に対して敏感に反応するようになる。惰性的生活のうちに麻痺させられた感性がそのつど更新され、社会生活のすみずみに五感の働きが行き届くようになる。そこで初めて、社会的不正をはじめとする正義の問題が他でもない私たち自身の問題として認識される。つまり、美の経験は私たちの社会的感性を高めることを通して、社会正義への関心を高めていくのである。

もともと、すぐに疑問が生じるかもしれない。美しい絵画や彫刻、豪華な絨毯、華麗な家具調度、趣向を凝らした服飾、それに贅を極めた邸宅。それらの美に囲まれていた貴族は社会正義への感受性に恵まれていたのだろうか。マリー・アントワネットは飢えた民衆の暴動を知って「パンがないのならお菓子を食えばよいのに！」と嘯いたと言われている。・・・しかし、この反論は美を特権的エリートの専有物とみなす根強い偏見にもとづいている。すでに指摘したように、スカリーはあらゆる人間の日常生活のすみずみに美を見いだしている。美は「気前よくふんだんにあり、ほとんどいつでもほとんど全ての人々に対して存在する。愛し合う人たち、その子どもたち、彼らの

庭を横切る鳥たち、その鳥たちの歌声のうちに美はある」(Scary 1999:60-61)。美しい事物に出会うという経験そのもの、これは社会経済的な階層格差とは必ずしも関係がない。マリー・アントワネットは絢爛たる芸術品や豪華な調度品に恵まれてはいたが、それは必ずしも美に出会う経験そのものに恵まれていたことを意味しない。⁶⁾

まず、人の注意が図らずも美しい人や物に向けられる。そして次に、この高められた注意が自発的に他の人や物へと拡張される。美しい事物はこの世界のあちこちに置かれていて、あたかも過ぎ去った敏活さを最も鋭敏なレベルに引き戻す知覚上の小さな目覚まし時計のような働きをする。美を通して、世界は私たちを知覚的気づかひの厳格な基準へと再び関与させ続けるのである(Scary 1999:81)。

美しい事物は「小さな目覚まし時計」のようなものである。それは惰性に眠らされている私たちの感性を目覚めさせる。たとえば、電車のなかで、思わず美しい人に目を奪われる。あるいは、美しい会話に耳を奪われる。私たちはそのたびに眼をこらし、耳を澄ます。このとき目覚めさせられた「知覚的気づかひの厳格な基準」は当の美しい人や会話にとどまらず、その貴重さ・繊細さ・傷つきやすさの認識とともに、他の人や他の会話へとふり向けられる。美との出会いは一人一人の人間の貴重さ・繊細さ・傷つきやすさへの気づきをもたらし、その結果、人を大切に扱わない不正な社会的状況に対する鋭敏な感受性を養っていく。かつてプラトンが、一人の人物の美しさに捕らわれる「エロス」からすべての人々に配慮を拡張する「カリタス」への移行について語ったよう

6) A. ストーンによれば、「映画『アメリカン・ビューティ』(American Beauty)はエレン・スカリーの最近の本『美と正義について』が展開する美と倫理に関する見解を地でいく結果となった。・・・両者の響き合いは不気味なほどであり、たんなる偶然とは思えない。おそらく、スカリーと『アメリカン・ビューティ』は合い並んで大衆意識の琴線に触れている。それは一千年来の美におけるスピリチュアルな意味の探究である」(Stone 2000)。ストーンはスカリーのいう「知覚的気づかひの厳格な基準」に触発され、作中の特異な登場人物リッキーに「アテンディングのアート」(art of attending)を見いだしている。元陸軍大佐の父親から虐待され、精神病院に放り込まれた経歴をもつ青年リッキーは、高校に通いながらひそかに麻薬の売人を続けている。彼は凍死したホームレス女性の眼、カメラにおさめた鳥の死体、北風に舞い続ける白いビニール袋など、いたるところに美を見いだし、深い救いを得る。

に、この「分配への圧力」こそは美しい事物のもつ際だった特徴なのである。

3 美による脱中心化

スカリーは美のもう一つの効果に着目している。それは私たちの誰もが持てあましていゝ我(エゴ)というものを脇によせてしまう働きである。「何か美しいものを見た瞬間、私たちは根本的な脱中心化(radical de-centering)を体験する。シモーヌ・ヴェイユによれば、美は「私たちが中心にいるという空想的位置どりを放棄する」よう迫る」(Scarry 1999: 111)。いいかえれば、私たちが自ら進んで利己心から自由になるのを助けてくれる。美は我(エゴ)を根本から脱中心化する。その結果、私たちは余分な自己防衛や自己昇進(self-promotion)の身構えから解放される。

それはあたかも人が自分自身の物語のヒーローやヒロインであることをやめ、民話で言われるような「脇役」(lateral figure)あるいは「施主役」(donor figure)になったかのようなのである。そのとき人は全体の平等性の状態に参加したように思えず、むしろ降格されたかに見える。しかし、平等に振舞っていると信じているとき、私たちはかえって自分の私的物語の中心人物として振舞っていることが多い。私たちが自分自身をたんに隣りにいる(adjacent)者、あるいは横にいる(lateral)者と感じるとき、私たちはおそらく平等の状態により近づいている。いずれにしても、美の倫理的な錬金術は、まさに別の文脈であれば降格のように見える事態がもはやそれと認識できなくなる点にある(Scarry 1999: 113)。

ここで「横にいる」(lateral)「隣にいる」(adjacent)という表現に注目したい。これは「側生」植物や「隣接した」家などの意味合いをもっている。私たちは美に出会ったとき、この世界の主役の座を美に明け渡す。といつても、美から逃げるのでも、ひれ伏すのでもない。その「横にいる」者、「隣にいる」者、「側生する」者として、美という主役の「脇役」として、そこにいる

ことを楽しむのである。主役の座をオリルことは自発的な降格である。だが、そうして初めて私たちは事実上、他者とのより平等な関係に入ることができる。反対に、お互いに強い平等意識をみなぎらせているときこそ、私たちの我(エゴ)はあくまでも主役の座に固執し、互いに他者を支配しようと必死になるのだ。

この世界の中心には自分がいなければならないという強迫。主人公はあくまでも自分でなければならぬという我執。こうした頑強な自己顕示や自己防衛の鎧を脱がせるには、倫理規範という北風よりも美という太陽の方がすぐれている。救いがたい自己中心性に対しては、どれほどの道徳的説教も効き目はない。かえって自己防衛の鎧を固く閉ざすか、道徳の仮面をかぶった抑圧に対する反抗を引きおこす。しかし、あたたかな、魅力的な、身も心も一新させられるような美の体験は、私たちが自ら進んで主役の座を明け渡すこと、「脇に寄る」(step aside)ことを可能にしてくれる。

根本的な脱中心化はまたアヘン入りの隣接性(opiated adjacency)と呼ぶこともできそうである。この世界で私たちが「隣にいる者」と感じさせる事物は美しいものだけではない。また、私たちに鋭い快楽をもたらすのも美しいものだけではない。しかし、美しいものは両者を同時にもたらす稀少な現象の一つと思われる。それは私たちが「隣にいる者」であることを許容し、同時に、究極の快楽を得ることを許容する。そして、私たち自身の隣接性こそが快楽を生み出すという意味感覚を創り出す(Scarry 1999: 114)。

美しい事物は「アヘン入りの隣接性」の感覚をもたらし、私たちに脇役であることの究極の快楽を味わわせてくれる。「アヘン」が意味するのは非日常的な快楽であり、中枢神経を冒された陶酔状態のことではない。私たちは美しい事物との出会いによって我(エゴ)から解放されるが、自己(self)そのものを放棄するわけではない。主役を美に譲ったうえで、自分はその「横に」あるいは「隣に」いるのである。

美による脱中心化はエゴイズムの自発的解消をもたらし、それだけで他者との共生に関わる社会正義への感受性を用意する。スカリーによれば、それは「他者との公正な関係を享受することへの前奏曲あるいは前提条件」を提供している。なぜならば、「すべての人のすべての人に対する関係の対称性」を要請する倫理的公正性にとって、すべての参加者にそれぞれの側生性において喜びをもたらすような美学的公正が大きな助けとなる」からである (Scarry 1999 : 114)。社会生活の場において、そこに参加する人々が脇役の快樂を知っていること、また、いつでも脇役になる用意があることが倫理的公正の実現に貢献する。その意味で、美学的公正は倫理的公正性のための前提条件となるのである。

4 美による正義の可視化

これまでの議論をふり返ってみよう。美に注目することは正義をないがしろにすることではない。むしろ、美の恩恵は「分配への圧力」をもつ。それは他の事物や人間に対して「知覚的気づかいの厳格な基準」の適用を促し、結果的に社会正義への感受性を高めていく。また、美の存在は私たちが主役の座から身をひき、喜んで脇役となることを促す。この「脱中心化」の働きはエゴイズムの抑制を通して社会正義の実現に貢献する。一言でいえば、美は正義に貢献する。

さて、ここまでは美と正義をそれぞれ独立に扱いながら両者の関係を検討した。しかし、さらに進んで、正義が実践されている社会関係がそのまま美として体験されるような場面を想定することはできないだろうか。スカリーは日常的な美の対象として物、動物、人間、自然環境のほかに、「代表者たちの討論」や「お祭りのパレード」などの社会的状況に言及している。具体的な物や人物だけでなく、人と人との関係性としての正義や公正さが美として感じとられる場面が想定されているのである。これによってスカリーは社会美学に固有の問題圏に足を踏み入れたことになる。

個々の物や動物や人間と異なり、正義や公正性

という社会的状況はこれを見たり聞いたり触れたりすることはできない。それは多くの人々の相互行為からなる複雑な状況であり、それ自体を感覚的に知覚することが難しい。スカリーは正義という社会的状況を五感を通して知覚することの困難について、交通ルールを例にあげて説明している。

正義にはほとんど感覚が使えない。たとえ実例が出されても、ほとんど感覚的理解に適さない。なぜなら、それはあまりに大きな領域(街や国の全体)に散らばり、無数の行為から成り、同時に起きる行為がほとんどないためである。・・私は曲がり角で交通規則が守られているかどうか見ることはできない。私は街の向こう側で同じ交通規則が守られているかどうか見ることはできない。交通規則の遵守が物質的でないというのではないが、その正義が孤立した地点ではなくすべての地点にわたる一貫性とその結果としての危害の不在にあるため、感覚的に可視的ではないのである (Scarry 1999 : 101-2)。⁷⁾

「交通規則の遵守」という社会的状況は私たち一人一人がその五感を使って知覚するには空間的に拡散しすぎている。いま私は目の前の横断歩道を見ることはできるが、向こうの曲がり角になるともうわからない。さらに、同じ地域内の無数の曲がり角の状況を同時に知覚することは不可能である。このことは社会的取決め (social arrangement) 一般にあてはまる。社会的取決めは「孤立した地点ではなくすべての地点にわたる一貫性とその結果としての危害の不在」に関わるため、感覚的に知覚することがほとんど不可能である。ただ、交通規則には法律(の言葉)という可視的な部分があり、ここには「冗漫に分散した社会的取決めにはない感覚的圧縮がある」。そのため、私たちは「美しい社会的取決め」よりも「美しい法律」をより頻繁に口にする (Scarry 1999 : 103)。いずれにしても、個々人の五感に対するアクセスがなければ、美を語ることはできな

7) スカリーは「正義」を「危害の不在」と同一視している (Scarry 1985)。

いのである。

とはいえ、社会的取決めであっても五感を通して知覚できる場合がまったくないわけではない。それはある社会的取決めが個人によって一望可能な小さな時空間のうちに「圧縮」されている場合である。

しかし、時には、公正な政治的取決めそれ自体が（それを処方し保証する法律だけでなく）感覚可能な時間と空間に圧縮され、・・・水や空やケーキやバラのように、その美が可視的となることもある。大きな集会所で代表者たちが知覚可能な一まとまりの空間で審議している場合がそうかもしれない（Scarry 1999 : 103）。

たとえば、ある架空の国の30の地域を代表する30名の代議員が一堂に会している光景を想像しよう。この30名の代議員たちはすべて対等の資格をもち、民主的な議事進行のルールに従って、各自が自由に発言を行っている。激しい議論の応酬があるかと思えば、思わぬ機知やユーモアに笑いをはじけることもある。気迫に満ちた呼びかけや当意即妙の受け答え、色とりどりの賛成や反対が展開されていく。参加者は誰もがその様子の全体を自分自身の眼で見、耳で聴くことができる。また、会議全体の雰囲気を感じ、それを体感することができる。そのとき、参加者はいわば「民主的審議」という社会的取決めを見たり聴いたり感じたりしているのである。

この場合、社会的取決めは小さな時空間のうちに「圧縮」されている。そのため私たちはこれを「水や空やケーキやバラ」と同じように知覚することができる。そこで、ちょうど「水や空やケーキやバラ」の美しさについて語るように、「民主的審議」の美しさを語る事が可能になる。ここでは「民主的審議」の正義あるいは公正さが「美」として可視化されている。すなわち、正義が美として可視化されているのである。スカリーは会議や討論それ自体を美の対象として感じとるからこそ「討論そのものの美しさ」に言及し、特定の政治的集会の不正や問題性に気づくためには「さまざまな議論と反論、機知、気迫、当意即

妙、反語、テストとコンテストが展開される、そうした場に完全な鋭敏さをもって参加することなしには不可能である」と述べていたのである（Scarry 1999 : 60-61）。

スカリーは社会的取決めの正義が美として可視化（より正確には、可感化）された歴史的事例として「古代ギリシャのガレー船」と「19世紀アメリカの街頭パレードやボート競技」をあげている。そこでは一連の作業を共同して行う人々の間の対等性、多元性、対称性が小さな時空間のうちに「圧縮」され、その場にいる人々自身がこれらの人間関係上の公正さを直接に知覚することができる。人と人の交わりが民主的に実践されているという状況、それが抽象的な正義として遠くから思考されるのではなく、まさに目の前に進行する出来事のただなかで一種の美として直接に感じとられるのである。

リズムカルな平等性の原理は古代ギリシャにおいて社会的取決めの領域で実践されたと言われている。そして、次の点が決定的なのだが、この社会的取決めは感覚的知覚を可能にする十分に小さな物理的空間に圧縮されていた。すなわち、ガレー船である。ガレー船の170本のオールと170人の漕ぎ手は、ちょうど立法議会のように、知覚者が見ることのできる一まとまりの小さな空間に収まっている。また、笛吹の笛に合わせて水を打つリズムカルな音は、知覚者が聴くことのできる範囲に収まっている。・・・こうしたガレー船の光景から、アテネの民主主義が生まれたのだ（Scarry 1999 : 104）。

社会関係における対称性は通常広い領域にわたって不可視に分散しているが、稀に例外的な場合には、感覚的知覚を直接用いることのできる小空間へ圧縮されることがある。・・・19世紀合衆国の歴史はパレードがきわめてアメリカ的な発明であることを示している。パレードは街路という凝縮された空間のうちに対等の資格で行進する市民団の多元性を展示している。ボート競技もまた水平な水面で行われる。ボート競技は「平等主義の理想」と

も民主的スポーツとも呼ばれてきたが、その理由は川岸に多様な群衆が集まるだけでなく、漕ぎ手のなかに多様な階級とジェンダーが代表されているためである (Scarry 1999: 106)。

スカリーの論理を徹底させれば、「古代ギリシャのガレー船」や「19世紀アメリカの街頭パレードやボート競技」においては、デモクラシーの社会正義が美として可視化 (可感化) されていたことになる。ここで「美しい」とされているのは、人と人の間の公正で民主的な関係性そのものであることに注目したい。たしかに、ガレー船の形や装飾、漕ぐ人々の衣装や動き、笛吹の音楽といった個々の事物も美しいにはちがいない。しかし、スカリーは「170人の漕ぎ手」の間の「リズムミカルな平等性」のうちにデモクラシーの社会的取決めが「圧縮」され、その場に居合わせる人々によって「美しい」と感じられたものと推定している。パレードやボート競技の事例も同様である。個々の出し物や道具、参加者の容姿や服装もそれぞれ美しいにちがいないが、そのすべてを含みつつ、「対等の資格で行進する市民団」や「多様な階級とジェンダーの代表性」にこそ美が宿るという考え方が重要なのである。⁸⁾

5 「社会美」の問題

正義が美として可視化 (可感化) されるというスカリーの指摘は重要である。私たちは人と人の関係性に宿る正義や公正性という、それ自体はけっして感覚できない抽象的なものを一種の美として体感することができる。この美が自然美でも芸術美でもないことは明らかである。それは「社会」の美であり、「社会美」と呼ばれるにふさわしい。美と正義の親近性を追求するスカリーは、図らずも「社会美」の領域に足を踏み込んでいる。

ところで、スカリーは「社会的取決め」(social arrangement) を考察の中心においていた。社会的取決めは「孤立した地点ではなくすべての地点

にわたる一貫性とその結果としての危害の不在」に関わるため、感覚的知覚がきわめて困難である。それが可能であるためには、広範囲にくり広げられる無数の社会的相互行為が小さな時空間のうちに「圧縮」されていなければならない。「ガレー船」は古代ギリシャ都市の「圧縮」であり、「パレード」は19世紀アメリカのスマールタウンの「圧縮」である。いずれの場合も、そこにデモクラティックな相互行為が凝縮され、「美」として可視化されている。

ただ、スカリーのいう「圧縮」は伝統社会に関しては説得力をもつものの、現代社会では有効性が小さいように思われる。たしかに伝統社会では、重要な集会や祭礼の場は当の社会全体を「圧縮」する側面を強くもっていた。現在でも、祭りや式典が地域社会を、入学式や卒業式が学校を、取締役会や株主総会が会社を、それぞれ「圧縮」している面がないわけではない。とはいえ、この「圧縮」には大きな限界がある。祭りも入学式も株主総会も、当の社会全体の仕組みや取決めを体现するにはほど遠いからである。まして、国会に日本社会が「圧縮」されているとか、北京オリンピック開会式に中国社会が「圧縮」されているなどと考えても得るところは多くないだろう。

スカリーは広域的な社会制度を中心においたため、その正義の可視化には「圧縮」が必要とされた。しかし、「社会美」の考え方は必ずしも「社会の圧縮」を想定しなくても成立するように思われる。社会にはマクロな制度の水準だけでなく、ミクロな相互行為状況の水準があり、その多くは個人が直接に見たり聴いたり体感したりすることが可能である。個々の具体的な社会的状況は確実に可感的な側面をもっている。たとえば、G. ジンメルは個人と個人の相互行為状況のうちに「社会」を認めている。「人びとが互いにまなざしを交わしあい、相互に妬みあい、たがいに手紙を書き交わしたり、あるいは昼食を共にし、・・ある者が他者に道を尋ねたり、たがいに着飾って装いをこらしたりすること」、ここにすでに社会が生まれている (居安 2004: 207)。この小さな社会は私たちの五感に直接に訴えてくる、すぐれて

8) 「正義の可視化」をめぐる議論は、『美と正義について』への書評でほとんど注目されてこなかった部分でもある。

可感的なものである。

たとえば、次のような相互行為状況を考えてみよう。

街を歩いていくと水道管の工事現場にぶつかった。歩道には大きな穴が掘られている。重機の振動が足下から伝わってくる。ふと、前に行く小さな男の子が母親の手をふり切り、穴のなかをのぞき込んだ。すぐそばの腕章をつけたおじさんがニコニコしながら子どもの動きを見守っている。追いついた母親は恥ずかしそうに笑い、「どうもすみません」と何度も頭を下げる。顔をあげた男の子は二人の様子を可笑しそうに見ている。

ここにも小さな「社会」が生まれている。親子連れのすぐ後ろにいた私は、この「社会」を自分の眼で見、耳で聴き、五感を通してその雰囲気を楽しむ。私はこの「社会」を「美しい」と感じる。ここにもまた小さな「社会美」がある。

この小さな「社会美」においても、人と人の交わりが可視化（可感化）されている。その感性的質感は三人の間の相互行為によって織りなされる関係性の総体から生まれている。それは愛情の関係性であり、遊びの関係性であり、また、道徳的配慮の関係性である。この場にはそれらが混ぜ合わさった「人と人とのコミュニケーションの雰囲気」が漂い、すぐそばにいた私はこの雰囲気に巻き込まれながら、これを味わうのである（Böhme 1995 [2006]）。このとき私はあくまでもこの一回的な「孤立した地点における」社会を味わっている。にもかかわらず、この私の体感的判断はより広域的な社会における人と人との関係性の考察にとっても重要な含みをもっている。なぜなら、広い社会にはこの事例と類似した状況が無数に存在するからである。私たちは「圧縮」の観点をとることなく、個々の社会的状況に「社会美」を認識し、そこからより広い社会のもつ感性的質感に関する考察材料を手にすることができる。

「社会美」とは社会的状況の美であり、人と人

の関係のあり方それ自体に見いだされる美である。こうした「社会美」の捉え方にはいくつかの先例がある。G. ジンメルは社交を人々が対等性と相互性の虚構のもとに社会形成を楽しむこととし、これを「社会学的な芸術状態」と呼んだ（Simmel 1917=2004b : 68）。社交の場では現実的な欲望や利害関心は忌避されるが、それでもなお、それらは場の背景にシルエットのように揺曳する。そのとき、重苦しい現実「遠くから聞こえ、しかも、その重圧は蒸発して一つの魅力になる」。こう書くとき、ジンメルは明らかに社交という状況に美を見いだしている。

また、石川三四郎は人々の自由な連合体に「縦と横とに綾羅をなせる複式網状組織」や「社交交響楽」を感じとり、その色彩や形態や音響のなかに美を見いだした。石川は人々の労働と生活が相互に結び合わされる様子を一種の芸術に見立て、「各自が自由にして自発的行動が許され」「全体に一貫せる一味の連帯性・一貫せるリズムを以て発展し」「各役員が特殊の旋律を奏すべき職分を持つ」ことが「社会美」の基本条件をなすと考えた（石川 1978a : 219）。

さらに近年では、A. バーリアントが「人間関係の状況」のもつ美的特質に注目している。エチケットのような日常儀礼から宗教儀式や祝賀会、さらには「小さな子どもとの関係性」や「友人関係」などが美的感触に富むとされる。とりわけ重要なのは「愛の関係性」のうちに感じとられる美である。この社会的状況の特質は「他者の完全な受け入れ、高められた知覚（とくに感性的な質の）、発見の新鮮さと興奮、人物と状況の独自性の認識、相互の応答性、十分な人格的交わりのための分離性の放棄、そして味わい（appreciation）を妨げるあらゆる制限や排他性の放棄」にある（Berleant 1999 : 154）。⁹⁾

これらの考え方・感じ方の根底には共通の認識がある。すなわち、「この世界には人と人との交わりが無数に生起している。これらの交わりはそれぞれが多様な感性的・美的な質感をもつが、そのなかには美として捉えられるものがある」という認識である。これが社会美である。社会美は自

9) G. ジンメル、石川三四郎、A. バーリアントの社会美学的認識については前稿「社会美学のコンセプト(1)」を参照して頂きたい（宮原 2008）。

然美や芸術美と並んで、私たちがこの世界で出会う美の一種なのである。

社会美もまた美である以上、スカリーが指摘するような特質を共有している。社会美は「気前よくふんだんにあり、ほとんどいつでもほとんど全ての人々に対して存在する」。とりわけ、「愛し合う人たち、その子どもたち」の間に存在する。社会美もまた「分配への圧力」をとまなう。それは社会的状況に対する「知覚的気づかひの厳格な基準」を更新させ、人と人の交わりの貴重さ・繊細さ・傷つきやすさにあらためて注意を喚起する。社会美もまたこの社会のいたるところに置かれた「小さな目覚まし時計」である。先の工事現場に見いだされたささやかな社会美もまた、私たちの知覚的配慮を敏感にし、その他のさまざまな社会的状況に対する感性的・美的吟味を促す。その結果、さまざまな人と人の交わりの美が新たに発見されると同時に、これまで見過ごされてきたさまざまな不正や悪の存在もまた意識に上ってくる。

社会美との出会いもまた、芸術美や自然美と同様に、それに出会う者を「根本的に脱中心化」する。私たちが自ら「脇に寄る」ことを促してくれる。しかも、外的な規範や権力によらず、自発的な喜びを通じて、私たちの我（エゴ）を緩めてくれる。それは社会正義に向かう前提条件を整えるとともに、それ自体がまた新たな社会美をもたらす契機となるだろう。工事現場でのささやかな社会美もまた、この私の我を少しではあるが確実に、「脱中心化」するのである。

おわりに

以上、E. スカリーとともに、美と正義の親近性を考察してきた。美は「分配への圧力」や「脱中心化」といった波及効果を通じて社会正義への関心を高め、「社会美」として正義や愛や遊びなどの社会的状況のもつ肯定的質感を可視化（可感化）する。少なくとも、「美は社会的不正から目を逸らさせる」という批判は一面的である。社会美学は自由で公正でデモクラティックな「正しい

社会」が、他ならぬ私たち自身の五感と心を通して、「美しい社会」として立ち現れる可能性を自覚的に追求するのである。

最後に、社会美学が美を再評価することの意味をあらためて考えてみたい。現代の美学は「芸術」から離れ、ギリシャ語の原義である「感性学」（「アイステーシス」）に立ち返る傾向を示している。G. ベーメの「雰囲気的美学」やW. ヴェルシュの「感性の思考」が代表的だが、いずれも日常的な人間の感性の働きそのものを研究対象とする方向に進んでいる（Böhme 1995 [2006]；Welsch 1990 [1998]）。とはいえ、新たな「感性学」もまた芸術の美からの離反を前提として受け取り、美を語ることは消極的である。ここにはまた、すでに述べた「美の脱構築」や「美に対する政治的批判」が大きな影を落としてもいる。¹⁰⁾

20世紀以降の現代芸術は、一方でコンセプチュアル・アートのような知的実験を導入するとともに、他方ではさまざまな新奇な感性価値の探究を試みてきた。「陰気な」「厳粛な」「センチな」「悲しい」「メランコリックな」「激しい」「熱烈な」「堅苦しい」「統一性ある」「ばらばらの」「混沌とした」「エレガントな」「どぎつい」「卑俗な」「驚くべき」「可愛い」「神秘的な」など、現代芸術の手ざわりは多種多様である（佐々木 2004：20）。しかし、そのいずれれもが狭い意味での美を指さない点では共通している。

芸術も美学も美を語らない。人文社会科学は美をもつばら「脱構築」的批判の標的としている。こうした時代状況にあって、美の肯定と復権を大胆に主張した先駆者の一人がスカリーである。¹¹⁾それが可能になったのは、スカリーが美の問題を芸術や学問の専門的領域に閉じこめず、広く社会一般の公共的問題として提起したからだと思われる。そして、ここにスカリーの探究が社会美学に接近する必然性がある。

社会美学もまた現代的な「感性学」の一端に位置するが、その関心は何よりもまず日常社会のもつ感性的質感の公共的探究にある（藤阪 2009）。人と人の関係性、人と人との交わりの感性的・美

10) G. ベーメはスカリーとは異なる観点から美を語ることの困難について考察している（Böhme 1995 [2006]：237-260）。

11) 美の復権の動きはスカリーのほかにも見受けられる（Dutton 2000；佐々木 2004；Nehamas 2007など）。

的探究は、芸術作品の場合とは異なり、実践的な倫理性による裏づけが当然に要請される。感性的・美的に「よい」社会と道徳的・倫理的に「よい」社会との間には強い親近性があり、両者は究極的には一致するはずである。ただ、「正しい社会」は「美しい社会」となるとき初めて、私たち一人一人の五感を通して深い理解を得ることができる。社会美学が「社会美」を中心におく必然性がここにある。¹²⁾

とはいえ、ここに言う美のイメージは広く、のびやかに、多種多様であることが望ましい。この点ではスカリーの議論には保守的な傾きも感じられる。スカリーのいう美には「対称性」(symmetry)「均衡」(balance)「釣り合い」(proportion)など、ヨーロッパの古典的かつ正統的な美意識が色濃く伺われる。スカリーは「美の脱構築」への異議申し立てを急ぐあまり、必要以上に古典的美意識を擁護しているように思われる。現代社会における美は欧米以外のグローバルな美意識を反映し、さらには、現代アートにみられるような新しい実験的感性に開かれていることが必要である。その上、ともすれば普遍的・超越的な権威性をともなう「大文字の美」から距離をとり、私たちの日常社会生活のいたるところにある「小文字の美」の価値を再認識することが大切である。

社会美学の先駆者の一人・石川三四郎が目指したのは「社会生活における人びとのおたがいの親しさを重要な課題とし、言葉のもっともひろい意味におけるエロティックなものを、文化の全領域にとりもどす」ことにあった(鶴見 1976: 470)。その石川が「美的民主主義」に言及してい

たように、デモクラシーは政治理論や政治・社会制度の次元だけでなく、人々の感性的・美的な日常実践としての側面をあわせ持っている。「自由」「平等」「公正」「平和」をはじめとするデモクラシーの理念や価値もまた、私たちの五感や心を通して初めて知覚可能になる感性的・美的な次元をもっている。「社会彫塑」(social plastics)を提唱したヨーゼフ・ボイスは「デモクラシーは愉快だ」という名文句を残した。この「愉快」もまた広い意味での美である。社会美学の観点は、デモクラシーが国家の政治制度上の問題であるだけでなく、私たち一人一人の社会生活上の交わりの質にかかわる問題でもあることを改めて浮き彫りにしている。¹³⁾

【参考文献】

Altieri, Charles 2001 'Beauty and Her Rivals', *Crossroads* 56 (Spring)

Berleant, Arnold 1999 'On Getting Along Beautifully: Ideas for a Social Aesthetics', P. Bonsdorff & A. Haapala (eds.), *Aesthetics in the Human Environment*, International Institute of Applied Aesthetics (Finland)

Berleant, Arnold 2005 'Ideas for a Social Aesthetic', A. Light and J. M. Smith (eds.) *The Aesthetics of Everyday Life*, Columbia University Press

Benson, Peter 2004 'On Beauty and Being Just by Elaine Scarry', *Philosophy Now* 44 (January/February)

Böhme, Gernot 1995 *Atmosphäre. Essays zur neuen Ästhetik*, Suhrkamp Verlag (=2006 梶谷真司・斎藤渉・野村文宏編訳『雰囲気美学』見洋書房)

Bowman, David 1999 'Does Beauty Really Equal Truth?', *Salon.Com* Nov. 9

Dutton, Denis 2000 'Mad About Flowers: Elaine Scarry on Beauty', *Philosophy and Literature* 24 : 249-60

12) 美と正義は端的に一致するのかもしれない。「かつて私の詩の多くは美と正義の間の議論だと書いた。そして、両者を対立させるのが長い間の流行であった。あたかも美の虚偽性が正義の容赦ない眼差しに暴かれるかのよう。しかし、私はエレン・スカリーとともに・・・こう考える。美と正義は究極的に一つである。美は物事がそうあるべき可能性を我々に提示する。その意味で、プラトンが信じたように、美は確かに徳を体現し、我々がその徳を体現することを要求する。・・・美の現前は我々にそのあまりの不在を思い起こさせ、我々が最善を尽くしてその不在を改善することを要求する。それがただ欠乏の苦痛を繕うためであっても。・・・美の正しさは正義の一形態である。・・・美は正しい社会 (just society) のイメージを提供する」(Shepherd 2001)。

13) 本稿は美と正義の親近性を強調してきたが、それは感性的・美的価値が道徳的・倫理的価値によって基礎づけられることを意味するわけではない。美はこの世界全体から与えられる恩恵であり、必ずしも人間存在に依存してはいないことに留意する必要がある。「美の平等性は正義よりも前にこの世界に入り、正義よりも長くこの世界に留まる。なぜならば、美をもたずことは人間存在に依存していないからだ。人間存在はこの世界の美の多くを創造してきたとはいえ、結局はより大きなプロジェクトの協力者であるにすぎない。この世界は私たちの貢献を受け入れてくれるが、かといって私たちに依存してはいない」(Scarry 1999 : 108)。

- 藤阪新吾 2009 「鮎屋を味わう—食事と消費の社会美
額」『関西学院大学社会学部紀要』107号（本号）
- 石川三四郎 1978 『石川三四郎著作集第三卷』青土社
- 居安正 2004 「ジンメルにおける「社会学の領域」の成
立」『社会学の根本問題』世界思想社
- Kenning, Eric 2003 'The Leisure of the Theory Class',
Liberty 17(8)
- 宮原浩二郎 2008 「社会美学のコンセプト(1)—理
論的考察の展開」『関西学院大学社会学部紀要』
106: 27-44
- Nehamas, Alexander 2007 *Only a Promise of Happiness*,
Princeton University Press
- 佐々木健一 2004 『美学への招待』中公新書
- Scarry, Elaine 1999 *On Beauty and Being Just*, Princeton
University Press
- Scarry, Elaine 1985 *The Body in Pain*, Oxford University
Press
- Shepherd, Reginald 2001 'Notes Toward Beauty',
Crossroads 56 (Spring)
- Simmel, Georg 1917 *Grundfragen der Soziologie* (=2004
居安正訳『社会学の根本問題』世界思想社)
- Smith, Zadie 2005 *On Beauty*, Penguin Books
- Stackhouse, John G. 2002 'The True, the Good, and the
Beautiful Christian', *Christianity Today* 46(1)
- Stone, Alan A. 2000 'Beauty and Redemption: American
Beauty and Elaine Scarry Look for Aesthetic
Experience in Unexpected Places', *Boston Review*
25 (February/March)
- 田野大輔 2007 『魅惑する帝国 政治の美学化とナチズ
ム』名古屋大学出版会
- 鶴見俊輔 1976 「解説」『近代日本思想体系 16 石川三
四郎集』筑摩書房
- Welsch, Wolfgang 1990 *Asthetisches Denken*, Philipp
Reclam (=1998 小林信之訳『感性の思考』勁草書
房)

A Conception of Social Aesthetics (2):

Reading Elaine Scarry's "On Beauty and Being Just"

ABSTRACT

This paper explores a conception of Social Aesthetics through an in-depth reading of Elaine Scarry's seminal work "On Beauty and Being Just". Against the political criticisms of beauty as socially constructed conservative ideology, Scarry defends the fundamental importance of our experience of beauty in not only reinvigorating our personal life but also in promoting broader social justice. First, the encounter with beauty entails "the pressure towards distribution". Beautiful objects heighten our perceptual acuity, and this heightened attention is then extended to other objects and situations. In the course of such an extension, we are sensitized to care about various social justices and injustices which were overlooked before. Second the experience of beauty "radically decenters" our egos. While we are destined to insist on our centrality in the world, the presence of beauty leads us to step aside and enjoy our 'lateralness'. Beauty makes us less selfish, and thus prepares us to respect and enjoy social justice on the voluntary basis. Third, there are cases in which just (or fair) social arrangements (or relations) are as such perceived as beautiful. Greek democracy was born out of the beautiful scenes and sounds of Galley Ships where oarsmen, in equal standings to each other, rowed together rhythmically and symmetrically. Through a close examination of these arguments, this paper brings out important theoretical implications for the conception of Social Aesthetics. In particular, the importance of Scarry's perspective on 'the beauty of social arrangement' or 'the visibility (or, more broadly, sensibility) of social justice' cannot be overemphasized. While Scarry's image of beauty seems to be biased toward the classical European standard, such a limitation may be overcome by introducing the imageries of non-European traditions and the experimental sensibilities of contemporary art.

Key Words: social aesthetics, beauty and justice, Elaine Scarry